

私の一冊

看護学科 増田明美 先生

浅田次郎著 『鉄道員(ぽっぽや)』

小鹿図書館 : 913.6/A 81 (集英社)

私が「鉄道員」を「ぽっぽや」と呼ぶと知ったのは映画からでした。俳優高倉健のファンで、「はるかなる山の呼び声」、「しあわせの黄色いハンカチ」など、映画はもちろん、テレビの映画劇場でも放送されるたびに繰り返し見入っておりました。

映画館へ足を運んだのは久しぶりでした。今日、健さんは、「どんな感動を私に与えてくれるのだろう。」そんな思いの中で、物語は始まりました。劇場の暗さから一転、雪がスクリーンからはみ出してくるのではと思われるくらい舞っています。さすが、健さんは北海道の雪がよく似合う。雪を舞台に現実と幻想が溶け込んだストーリーは静かに展開していきました。満足感いっぱい映画館を出たのを覚えております。

それから程なく、駅ビルの中の本屋さんに立ち寄ったとき、平積みされた本の中から「鉄道員」という文字が目飛び込んできました。本の帯には「あなたに起こるやさしい奇跡」と記されていました。偶然友人に会ったような懐かしさを覚え、本を手にとり、ページを繰りました。しかし、目にする文字はもう別の話。まさか短編集の中の一話であるとは思いませんでした。しかも、たったの46ページ。映画とは違う作品ではないかと思いつつも購入し、電車の中ですぐ読み終わりました。映画と同じストーリー、間違いなく原作です。どうして、これほど短い原作からあのような雄大な映画が完成したのか不思議でした。

この不思議を胸に自宅に帰り、もう一度読み返しました。映画を観て、本も一度は読んでいたのに今度は違う感覚なのです。ページを捲るのも、もどかしいほど物語の世界に引き込まれるのでした。「鉄道員」は、私の心の底に眠っていた「せつなさ」を呼び起こしてくれました。

主人公である乙松は、雪深い小さな駅の駅長さん。さびれた町、結ぶ路線は廃止が決まっています。乙松も定年が迫っています。乙松の人生は、旧国鉄色の単行ジーゼルが吹雪の幌舞線を走る姿そのものです。「もっと楽な生き方があったはずなのに。自分の気持ちを正直に出したらどう」って呼びかけたくくなります。『仙次は涙がこぼれそうになるたびに背筋をぴんと伸ばし、キハの笛を力いっぱい踏みしめた』46ページの最後の文章です。『美寄駅のホームを出ると、幌舞行きの単線は町並をぬけるまでのしばらくの間、本線と並走する』また、最初のページに戻ってしまいます。

何度読んでも物語の中に引き込まれます。今度は冷静に文字を追ってみよう。しかし、この決心はすぐ挫折し、涙にかかります。なぜなのか、本を閉じて静かに考えてみました。『ふん、いいふりこきやがって』『なして？』方言が臨場感を醸し出します。『気動車は緩い勾配を登り、左右には稜線が迫っていた。短いトンネルを抜けるたびに、雪は深みを増していく』浅田次郎は鉄道員で幌舞線を走っていたのかと詮索したくなるほどの細かい描写が話の流れを包み込みます。

浅田次郎は1995年「地下鉄に乗って」で吉川英治文学新人賞、1997年「鉄道員」で直木賞、2000年「壬生義士伝」で柴田連三郎賞、2006年「お腹召しませ」で中央公論賞、司馬遼太郎賞を受賞しているのです。日本の文学賞総なめです。

エッセイ集「ひととは情熱がなければ生きていけない」の中で「鉄道員」を書き上げた様子が出ていました。『秋虫のすだき始めた夜更け、茅屋のお勝手にひとりヤキソバを作りながら、突然天から降り落ちてきた「鉄道員」である』小説の神様が書かせたような表現をしております。『わずか50余枚の思いつきとも言える短編小説である』と遠慮がちに述べています。

中学時代にはもう小説家をめざしており、中2の一年間、毎日文庫本一冊読むことを実践し、高校時代には、その時書いた小説でそのまま文壇デビューをはたし、新人賞のひとつもとるだろうと思込んでいたそうです。しかし、浅田時代はまだまだ遠く、世に出るまで20年が必要でした。その間、社会と断絶していたわけではなく、商才も人一倍あり、家庭も持ちました。しかし、いかなる時も、「自分は小説家になるために生まれたのだ」この思いは、忘れなかったそうです。努力が小説の神様を呼び込み、「鉄道員」が完成したのでしょう。

久しぶりに「鉄道員」をひろげ、忘れかけていた「せつなさ」を味わいたくなりました。